

2018年5月31日ウェブセミナー「内部監査 x デジタイゼーション～デジタイゼーションのトレンドと内部監査における活用～」 ご質問とプロティビティの回答

No.	頂いたご質問	Protiviti回答
1	市販ツールだけでなく、自社で工夫して作成した簡易的なものまで含め、広くツールと捉えていいでしょうか。	本来ツールを活用して達成しなかった目的や効率性が実現できれば、自社で作成したツールを含め、広く捉えていただいても良いと思います。監査専用のパッケージツールでは、各社のベストプラクティスを基に構築されているため、各社監査部が必要としている機能があらかじめ用意されています。
2	実際にデジタルツールを導入している例は日本や外国でどれくらい増えてきているのでしょうか。どのような点で特に監査部や経営者はメリットを感じているのか具体的な例を教えてください。	データ分析やCSAのツールは国内外問わず、かなり普及しています。内部監査管理ツールも海外では導入事例が多くあり、昨今では日本でも導入企業が増えています。監査人にとっては監査業務の効率化が図れること、監査管理者としては管理や分析が容易になること、経営者としては分析結果や状況がリアルタイムで確認できるようになることがメリットとなります。
3	ACLとIDEAの違いは何でしょうか。	基本的には同じ機能を持っていますが、操作ログの見え方や分析の自動化の方法が少し異なります。操作ログについてはACLは一連の操作が時系列で記録され、IDEAでは個々のテーブルごとに記録されます。分析の自動化においてはACLではスクリプトという簡易プログラムを使って比較的簡単に行うことができますが、IDEAではVBレベルのプログラミングスキルが必要となります。
4	導入コストについて教えてください。	ツールの種類(内部監査管理ツール、データ分析ツール等)や導入・活用範囲によって異なりますので、一度ご相談下さい。
5	実際Protivitiが監査する際にも、こうしたデジタルツールは活用されているのでしょうか。活用されている場合、どのくらいの割合の案件がデジタル化できているのでしょうか。	クライアントの監査を支援する際にも、データ分析ツール、内部監査管理ツール、CSAツール等を活用しています。支援範囲にもよりますが、例えば内部監査の支援ではリスク評価の結果を入力し、グラフ化するところから、リスクと手続きを関連付け、手続きを実施し、監査調書及び監査報告書の作成、フォローアップ等、多くの監査業務でデジタルツールを活用することができます。
6	GRCは業務監査の指摘事項をテキストベースで報告するような監査報告にも活用できるのでしょうか。	はい。GRCツールに登録した指摘事項データはテンプレート化された監査調書、報告書で出力できるほか、Excel等加工できる形での出力も可能です。
7	活用したツールの分析ロジックに、監査結果が左右されることになるとは思いますが、監査ツール自体の監査はどのように行うことができるのでしょうか。また、Protivitiはどのように監査、評価をしていますか。	監査ツールの監査よりも、分析ロジックを設計する際に一人ではなく、複数の視点で分析ロジックの妥当性・正確性を確認・検証ことが有用であると考えます。
8	実際にデータ分析している事例を教えてください。	グループ会社の財務諸表データ分析やプロセスごと(経費・購買・販売・コンプライアンス等)の分析など、業種を問わず多数の実績があります。詳細については、個別にご説明が可能ですので、ご相談下さい。